

陸軍少飛平和祈念の会、会報 No16 号

2019(令和元)年 12 月

本会のHP <http://sho-hi.sakura.ne.jp/>をご覧ください。
毎月第3土曜日AM10～12時に定例会を行っています。ご参加ください。
会報をメール配信に切り替えています。
メールアドレスを、heiwakinen@sho-hi.jp までお知らせください。

(1) 会員数が70名近くになりました。

会員には、正会員（年会費千円）と賛同会員（年会費無料、本会の趣旨に賛同）の二つの種類があります。現在、正会員と賛同会員を合わせて、70名近くに増加しました。

本会の発足当初は、14名（元少飛2名、市民12名）でしたが、現在は、市民42名、元少飛25名の67名になっています。本会の理解者、賛同者を増やすことは重要です。友人・知人に入会をお勧め下さるようお願いします。

(2) 新会員です。＜正会員＞横溝清俊（東京都日野市）、小栗慎次郎（東京都町田市）、少飛16期田中通義（千葉県野田市）、桜井久雄、富樫健吉、小島晴則、加藤かよ（いずれも新潟県新潟市）、望月則子（東京都中央区）
＜賛同会員＞小山敦子（東京都葛飾区）、岸佳子（千葉県柏市）、平田進（東京都足立区）です。よろしくお願いします。

(3) 会費、寄付。石川清治会員から1万円の寄付、17期会の青木勇、金徳泰、佐藤昭、望月則子の4人の会員から各々、来年の会費1千円と2千円の寄付金を納入していただきました。ありがとうございます。

(4) 新潟日報に記事が掲載されました。

11月18日、新潟日報で本会の活動が紹介されました。証言集のなかの新潟市在住の齋藤光雄さんを取り上げています。本会のHPにアップしましたので、ご覧ください。

(5) 「東大和・戦災変電所を保存する会」の中野さんが本会の定例会に参加され、来年8月22～24日に東大和市で開かれる「第24回全国戦争遺跡保存ネットワーク東大和大会」への協力について要請を受けました。

(6) 元少飛・生存者の交流会

本会では、現在、ご健在な元少飛の方々25名に会員になっていただいています。90歳を超える方が多いのですが、第17期の方々が「生存し

ている元少飛の交流会」を希望しています。複数の「期」による元少飛の交流会はこれまでありませんでした。「先輩への敬意」を表したいという意味で交流できないかという希望です。目標は、来年の桜の咲く頃、場所は、靖国神社近くの偕行社を希望しています。

本会も、出来るだけ協力させていただくということで、本当に実現が可能かどうか、元少飛の方々の健康面、体力面等、情報収集・調整を行うこととしています。

(7) 少飛16期田中通義さんの自叙伝出版記念会

少飛16期田中通義さん(千葉県野田市)が、来年2月22日に自叙伝「風雪九十三年」の出版記念会を開きます。場所は千葉県野田市のホテル、時間は正午から午後3時、会費3千円、東武野田線の駅から送迎バスがあります。関心ある方は鳥海(090-6485-7911)までご連絡下さい。

(8) ビデオ収録。11月6日に予定していた17期の奥山左近さんは、体調不良のため延期になりました。11月18日、17期の杉本明さんのビデオ収録を、逗子市沼間コミュニティセンターで実施しました。次号で概要をお伝えします。

(9) 11月10日、禅昌寺で第57回少飛慰霊祭がありました。元少飛の参加は15期甲の滝波さん、15期乙の菊池さんのお二人でした。他に東京陸軍少年飛行兵学校の職員だった池谷タカさんが参加しています。

(10) 今後の方針

- ・今年度の収入は、真如苑助成金、会費、寄付金、証言集の販売代金等です。現段階で約27万円の残額があります。
- ・ビデオ収録を引き続き実施。証言第二集の刊行は来年度としています。文字起こし等の準備が必要で、来年度早々刊行するには、今年度中に準備を進めておく必要があります。業者委託でなく自分たちで文字起こしをする意見があり、会員の皆様のご協力をお願いしています。
- ・本会の活動をPRするCDの作成についても検討していきます。

(11) 10月10日、埼玉県新座市の栗原ふれあいの家で、午後1時から5時前まで約4時間、15期乙上野辰熊さんのビデオ収録を行いました。以下がその内容です。15期乙は、本会の菊池副会長と同じで、経緯が重なる所以ありますので、少し詳しく報告します。

昭和3年3月13日山口県萩市で誕生。昭和9年萩市立椿東尋常高等小学校に入校。翌10年鉄道敷設に従事していた父を追って、家族で満洲の佳木斯に移住。門司港から清津港、鉄道で豆満江を渡り牡丹江、林口まで行った。その先は工事中で佳木斯までバス。まだ馬賊や匪賊がいてバスを関東軍の独立守備隊、満洲警察が警備していた。民家を借りた小

学校は、上野さんとお姉さんを入れて13人。先に入植した武装移民団の人と話した。11年秋、鉄道開通、佳木斯駅で開通式があった。内地から移民団がどっと入植してきた。12年7月盧溝橋事件、占領地の工事が多くなり、13年春、家族で天津に移住した。



以前より米英仏日等の租界があり、小学校には千五百人の生徒がいた。14年に父が鉄道事故で死亡。姉婿が工事を引き継ぎ、15年に次の工事の北京に行く。北京日本第一小学校を三学期のみで卒業、北京日本中学校を受験し合格した。2年生の12月8日、大東亜戦争に。2年生終了時に退学して北支那開発(株)という国策会社で働く。翌年春15歳で少年飛行兵を受験した。

9月20日、大津陸軍少年飛行兵学校の第二次試験の出頭通知が来た。試験は24日だった。当時北京から大津まで、順調でも3日かかった。渡航許可証や切符の手配など慌ただしく過ごして翌日出発。特急「大陸」釜山行で鴨緑江を渡り日本領朝鮮に。乗ってきた曹長さん達は平壤飛行場から大刀洗飛行学校の助教に赴任する所だった。飛行学校の事、操縦の事、訓練の事等いろいろ聞いた。釜山港への到着が遅れ、関釜連絡船に乗れず博多行きに変更。8年半ぶりに内地に帰り、博多から京都市行き急行列車に乗った。超満員で炭水車の梯子にしがみついた。門司駅でようやく通路に座れた。岡山で席を譲ってくれた人にお礼に羊羹をあげ、内地はお菓子どころか毎日のご飯も十分でないことを知る。

夕刻大津に着き、翌朝、大津少年飛行兵学校の大講堂に全員集合。内地の合格者は既に各地に先発、朝鮮、台湾、満洲、中国の外地組が集められていた。身体検査、適性検査など3日間、十何種類の試験を受け、即合格発表。操縦は大刀洗、通信は加古川、整備は八戸の飛行学校だった。基本校を省略して直接実習校に行く速成教育で、基本校1年の16期生より先輩になった。不思議だった。夜汽車で九州の甘木駅、大刀洗陸軍飛行学校甘木生徒隊へ。10中隊に配属された。東京校と大津校から先発組が4, 5日前から来ていて、外地組が到着して昭和18年9月28日に全員が揃った。寝台、軍服、軍帽、下着等が支給され、食事当番、清掃と忙しかつ

た。その夜に初めての点呼、頭がボーとなり意識を失った。医務室で気が付き、軍医殿から「疲れた」と言われた。

10月1日入隊式。生徒隊長土井中佐が九五式中級練習機（赤トンボ）で練習場に着陸、挨拶後離陸して帰った。驚いた。数日後全員で約4 Kmの大刀洗飛行学校本校に行軍、半年前に入隊していた14期乙と合同で歓迎式典をした。「特操一期生」が赤トンボで離着陸訓練をしていた。翌日から基礎体力づくりの体操、駆け足、小銃や銃剣術等の訓練をした。三食の食事と芋の子を洗うような入浴時間が唯一の息の抜けるひと時だった。3か月で心も体も陸軍軍人らしくなった。しかし15、16歳の少年、ベッドで涙を流すものや1、2人の脱走者の話を聞いた。1か月ぐらい経った頃、突然中隊長から母の手紙を見せられた。関釜連絡船が米海軍潜水艦に撃沈され、母は気が気でならなかったらしい。「今返事を書け」と葉書を渡され、元気でやっていると書いて中隊長に渡した。

12月30日基本訓練終了、3日間の正月休みに萩の叔父を訪ねた。帰路、汽車の窓から軍帽をホームに落とし、隣の駅で届けられるのを待った。このため12時までに帰隊出来なかった。腹痛の診断書と連絡電報で営門破りの重い罰は免れたが、便所等の3日間の懲罰掃除を命じられた。

学科は飛行機の構造、空気力学、小銃の手入れ、初級グライダーの実習が始まった。3月、6か月間の教育の締めくくりに、完全武装で大宰府天満宮に往復行軍した。午前3時に非常呼集、四列縦隊で行進、天満宮で飯盒炊飯、約2時間の休息後、夕刻甘木隊に帰った。田舎っ子は強く、都会っ子に落伍者が多かった。

昭和19年3月、甘木生徒隊の乙種生徒を終了、朝鮮の大刀洗飛行学校京城教育隊に配属された。同時に終業となった大刀洗飛行学校本校生徒隊の14期乙の全員と一緒に朝鮮に向かった。昭和19年4月1日陸軍上等兵になった。15期乙で操縦の辞令。事故等の怪我死亡の保障が異なり階級が必要だった。

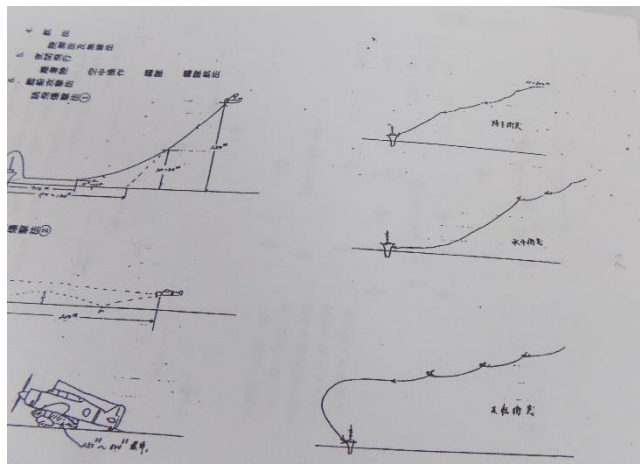
7月下旬、大刀洗飛行学校・京城教育隊の基本操縦全課程を修了、戦闘、軽爆、重爆、偵察に分科された。戦闘分科が主力で50数名が満洲の哈爾濱の戦闘教育飛行隊に。重爆、偵察は少人数だった。朝鮮平壤の軽爆の第13教育飛行隊に配属となった。大刀洗、熊谷、宇都宮から120名が合流した。主要機種は、九九式襲撃機（キ51）、金属の単葉低翼、エンジンが150馬力から950馬力になりスピードが全く違った。自動車教習所の練習車からいきなりフェラーリに乗ったようなものだ。それでも2、3日の同乗飛行で単独の離着陸になった。6か月の過程を4か月に短縮された科目が多かった。宙返り等の特殊飛行、軽爆科本命の降下角60度の急

降下、超低空飛行などを訓練した。

10月1日全員が陸軍兵長に任用された。南方戦線で敗色が濃くなり、比島戦線で神風特別攻撃隊が編成された。陸軍も特別攻撃隊を編成。11月末、4か月の教育飛行隊の課程を終了、「陸軍飛行機操縦術習得記章」を受領、一応一人前の操縦者と認められたが、更に戦隊等で錬成教育を受ける必要があった。

19年12月1日、戦隊による錬成が不可能になり、第13教育飛行隊が第23錬成飛行隊（宙527部隊）として新編発足した。昭和20年になると海軍機同様に艦船攻撃の習得が必須となった。2月錬成教育が終わり

りに近づいた頃、特別攻撃隊の志願者募集が始まった。2月末日特攻隊第一陣12機が編成され各務ヶ原飛行場に受領に飛び立った。3月半ば、陸路各務ヶ原飛行場に爆装完了の九九襲受領に出発した。各務ヶ原で、と号（特攻隊）72隊の仮編成式を行った。12機



受領に一か月近く要した。この頃空襲で名古屋市内の大半が焼け野原同様になった。昭和20年5月23日助教要員として訓練中、突如、萬世飛行場で沖縄航空作戦中の飛行第66戦隊に転属となった。平壤駅から釜山行き列車に乗り、陸路鹿児島に出発した。対馬海峡と下関港を避け、山口の仙崎港から博多駅に着いた。博多で宿泊中、萩の叔父を訪ねた。予定より4日遅れて戦隊本部に出頭した。25日以前に萬世に入っていたら、5月末か6月初めの出撃に出されていたかもしれない。予定通りに着いていたら、72振武隊を見送っていた。（写真は特攻の降下衝突、水平衝突、反転衝突の飛行図）

6月に三角兵舎で待機、演習していたが、現保有機の維持のため敵襲の時、戦闘機以外は回避となった。6月23日、基地通信隊が、沖縄地上戦玉砕の報を傍受した。6月末、飛行第66戦隊は大刀洗北飛行場に転進。知覧の第65戦隊も目達原飛行場に転進した。8月11日の朝非常呼集となり、戦隊本部に駆け付けたが何もなくて解散となった。12日朝も非常呼集したがその場で解散。13日真夜中に起こされ、飛行服に着替えて三中隊の指揮下に入った。三中隊全機の出動待機命令が出ていた。14日出動準備は完了していたが、そのまま待機になり、「明日重大発表があるので

戦隊本部に集合せよ」ということになった。15日11時頃マラリアが再発、熱が上がり寝込んでいたが、玉音放送があると聞き、毛布を被ったまま聞いた。熱で何も聞こえなかった。翌朝戦友から終戦の詔勅であったと聞かされ敗戦を知った。しかし停戦命令が出ていなかったのもので、飛行場に駆け付け次の命令を待った。待機中の特攻隊機が飛び立つ心配をして、航空軍参謀が目達原、大刀洗に駆け付け「停戦命令が出るので宿舎で待機」となった。飛行機の燃料を抜き、飛行場に障害物を置けと命令が出た。無条件降伏、戦闘停止、虚脱感で誰も口をきこうとしなかった。戦隊は何故か戦隊長が不在で、各中隊長の責任で解散になった。翌朝それぞれの故郷に向けて復員。と言うか追い返されたという感じだった。甘木生徒隊に入隊して2年足らず、17歳5か月だった。